

FaulknerのMississippi Poems評釈

原口, 遼
九州大学大学院文学研究科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6786974>

出版情報 : 九大英文学. 34, pp.141-171, 1991-12-02. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

Faulknerの*Mississippi Poems*評釈

原 口 遼

〔『ミシシッピ詩集』とは〕 William Faulkner (1897-1962) が小説家になる以前、盛んに詩作をしていた事は今ではよく知られている。フォークナーは当時の事について尋ねられると、自分は当初詩人になりたかったのだがそれを果たす事ができなかったのも、自分は「詩人になりそこねた人間」(“a failed poet”)なのです、と半ば自嘲的に半ば愉快そうに答えるのが常であった。事実、彼は『大理石の牧神』(*The Marble Faun*, 1924年刊)や『緑の大枝』(*A Green Bough*, 1933年刊)といった詩集も出版しているのだが、若い時代には、そうした詩を手書きにしたりタイプで打ったりして、小冊子の形にまとめ、極く親しい人たちに一種の私家版としてプレゼントしていた様である。

ここで取り上げる *Mississippi Poems* (以下『ミシシッピ詩集』と呼ぶ)も、そのようにして1924年12月の暮れ(フォークナー27歳時)、小学校時代のかつての同級生 Myrtle Ramey にプレゼントされたものであって、そこには12編の詩が収められている。¹ こうした詩集を贈られたのは、例えばその他に、後年フォークナーの妻になった Estelle Oldham や、フォークナーがプロポーズして結局失恋に終わった Helen Baird 等がいて、彼らはそれぞれ、『春の幻』(*Vision in Spring*, 1921年、ただし贈られた年)と、『ヘレンへ——求愛』(*To Helen: A Courtship*, 1926年、同)と題する詩集を贈られている。

1924年の大晦日の前日の事(即ち、12月30日)なのだが、マートル・レイミィは、フォークナーより4歳年長で当時フォークナーの詩作上の指南番をしていた Yale 大学出の弁護士 Phil Stone (当時、31歳)に、お茶に来ないかと誘われた。そこでその午後ストーン法律事務所へ出かけてみると、そこにはフォークナーも来合わせていて、彼女は今まさに出版されたばかりのフォークナーの処女詩集『大理石の牧神』(ストーン自身の序が付されている)

を、両人のサイン入りでプレゼントされた。その時、フォークナーはさらに薄緑色の表紙の小冊子を贈ったのだが、それがこの『ミシシッピ詩集』であった。フォークナーはさらにまた、翌年(1925年)、ニューオーリンズの雑誌『ダブルディーラー』(*The Double Dealer*)の4月号に掲載される事になる *VERSE, OLD AND NASCENT: A PILGRIMAGE* (『古い詩と生まれいづる詩——ある巡礼』)と題する、タイプで打った批評文のカーボンコピーを贈ってもいる。

マートルは小学校3年生のときに、フォークナーと同級であった。フォークナーは1905年に小学校に入学したのだが、翌1906年9月の新学期には成績優秀の理由を以て、2年次を飛び級して3年生にさせられたが、その時の同級生の一人がマートルだった。その当時のマートルは病弱で欠席しがちの子であったようである。

『ミシシッピ詩集』がマートルにプレゼントされたときの状況からみると、ストーンもフォークナーも、今まさにボストンの出版社(*The Four Seas Press*)から手元に届いた、兩人合作ともいべき処女詩集の『大理石の牧神』を手にして、その快挙を一種誇らかな気持から、昔馴染みで恐らく詩心もあり、当時まだ結婚していなかったマートルに知らせたかったのであろう。そしてそのついでに、さらに次なる企画も知らせたくて、批評文(『古い詩と生まれいづる詩——ある巡礼』)の写しを贈ったものと思われる。

〔装丁および内容について〕 本詩集については、この時マートルに贈られたものの他にストーンの手元にあったものがある様であるが、その内容が全く同一のものであるかどうかについては『ミシシッピ詩集』の前書きを書いているJoseph Blotnerは述べていない。いずれにしても、マートルは半世紀以上もの間その冊子を手元に大切に保存していて、それは後に、フォークナー研究者にしてフォークナー関係の資料蒐集家であるLouis Daniel Brodskyの手に渡り、今回ここに公の形で出版され一般読者の読書の便に供される事になったというわけである。

〔邦訳について〕 この『ミシシッピ詩集』の邦訳については、森田孟氏が、1987年に筑波大学の紀要の『文芸言語研究』に訳出している。² また最近刊の富山房の『フォークナー全集』I (1990年12月刊)に平石貴樹氏のものが掲載

されている。³

ところで、この『ミシシッピ詩集』の12編の詩をよく調べてみると、それらのうちの8編は後年になって、『緑の大枝』（1933年刊、44編の詩を採録）に若干の字句を修正して収められている。そしてこの『緑の大枝』の方は福田陸太郎氏訳が、『フォークナー全集』Iの同一巻に収められている。であるから、読者は福田訳と平石訳とを比較する事ができるのであるが、その仕上がり具合は、ほぼ同一の詩を訳したのにはしては、その字句、調子、従って読者が受ける印象も相当に違ってきているようである。

今ここに、今後の議論上の便宜の点から『ミシシッピ詩集』に収められた12編の詩に、前の方から順番に番号を振り、各詩をその番号で呼ぶ事になると、『ミシシッピ詩集』のNo. 3は『緑の大枝』のNo. 35に、(以下同様に) No. 4はNo. 28、No. 5はNo. 8、No. 7はNo. 44、No. 9はNo. 42、No. 10はNo. 30、No. 11はNo. 14、No. 12はNo. 29に対応している。⁴

〔各詩の形式と全体の並べ方〕 さて本詩集の形式面の事について簡単に述べておきたい。⁵ 『ミシシッピ詩集』の12編の詩編の各詩を、その第1行で示すと次の通りである。

1. Shall I recall this tree, when I am old,
(4, 4, 4, 4行の4連16行、無題。)
2. Moon of death, moon of bright despair:
(4, 4, 4, 4行の4連16行、無題。)
3. The courtesan is dead, for all her subtly ways,
(4, 4, 4, 2行の4連14行のソネット形式、“INDIAN SUMMER.”の表題あり。)
4. Over the world's rim, drawing bland November
(4, 4, 4, 4行の4連16行、“WILD GEESE.”の表題あり。)
5. He furrows the brown earth, doubly sweet
(4, 4, 4, 4, 4, 4, 4, 4行の8連32行、無題。)
6. You, who so soon with night would break
(5, 5, 5, 5行の4連20行、“THE POET GOES BLIND.”の表題あり。)
7. Far blue hills, where I have pleased me,
(4, 4, 4, 4行の4連16行、“MISSISSIPPI HILLS: MY EPITAPH.”の表題あり。)

8. Where has flown the spring we knew together?
 (4, 4, 4, 4 行の 4 連16行、“DECEMBER: TO ELISE.”の表題あり。)
9. Beneath the apple tree Eve's tortured shape
 (4, 4, 6 行の 3 連14行、“MARCH”の表題あり。)
10. Gray the day, and all that year is cold,
 (4, 4, 4, 4 行の 4 連16行、“NOVEMBER 11TH”の表題あり。)
11. His mother said: I'll make him
 (6, 8, 6 行の 3 連20行、“THE GALLOWS.”の表題あり。)
12. As to an ancient music's hidden fall
 (4, 4, 4, 4 行の 4 連16行、“PREGNACY [PREGNANCYではない] の表題あり。)

Nos. 1—7 の詩には、順次、ローマン数字で I—VII の番号が付されているが、Nos. 8—12 までの詩には番号が付されていない。また、Nos. 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 の 9 詩には表題がつけられているが Nos. 1, 2, 5 の 3 詩は無題であるなど、形式上の不統一が見られる。これも本詩集が、そのままの形で出版を意図されたものではなく、手作りの私家版であったという事から説明がつけられるであろう。

【構造と主題について】 本詩集を今、全体的に眺めてみると、全体を貫く一貫した統一的なテーマは見つけ難いようである。これも本詩集が個人（この場合はマートル）に対してプレゼントする事を目的とされ、とりあえずフォークナーが気に入ったものを纏めてみたという事から説明できるであろう。しかし今、眼につく全般の特徴を大まかに述べてみれば、それらは恐らく次の様になるであろう。

- (1) 春夏秋冬の季節の変化、特にその隆盛と凋落の側面を歌いながら、四季の一巡を以て詩集に、ゆるやかな形ながら一つの円環的構造を与えるような構成になっている。
- (2) 詩集のタイトルが示すように、フォークナーの故郷のミシシッピの土地への愛着・愛情というものが強く感じられる。
- (3) 太陽、月、星、山河、溪谷というものが歌われていて、それらが詩人の内面を表わすような形で詩が歌われている。
- (4) 主調音としては、孤独感、憂愁の感情が dominant なものとして

感じられる。

- (5) いつかは故郷のミシシッピの土地と訣別し、もっと広い世界に出て身を立てるのだといった若者らしい野心と同時に、自分の将来に対する不安感も表わされている。
- (6) 中にはNo. 5の詩のように、自分の土地を黙々と耕し続け、地道に生き抜いて行く農夫の事を描写した詩のように、フォークナー後年の小説世界の一面を彷彿とさせる詩もある。
- (7) 自分の一生を既に透視し、自分の身がいかになっても故郷の事を忘れまいぞとする、覚悟が感じられる。

さらに、細かく見て行けば他に幾つかの点を指摘することもできようが、今全体的に見渡した時の、大まかな印象を捉えるならば以上のようなものになるであろう。

〔議論の手順〕 さて、これから手元にある *Mississippi Poems* の原文と、平石訳、森田訳を比較しながら読んでみたいのだが、今、紙幅制限の関係上、その代表例としてNo. 3の詩を取り上げる事にしたい。実は、当初Nos. 3, 6, 7, 8, 10の5詩をサンプルとして取り上げ詳論しようとしたのだが、いざ取りかかってみると両氏の訳文が余りにも「すごい」ので、一々お付き合いしては、文字どおり応接の暇がなくなりそうで、またその必要もなからうというわけで、ここでは、代表例を一例上げてこれに評釈を施し、他の4詩については、拙訳、原文、森田訳、平石訳を順次掲げ、短評を付し、読者諸兄姉の研究用の材料を提出しておく事にする。暇と熱意のある向きは、日曜の午後など研究の材料にでもして頂ければ幸いである。

なお、各詩の全訳は『文学研究』第89輯（九州大学文学部）に掲載予定である。

〔No. 3の詩について〕

〔拙訳〕

インディアン・サマー

遊女は死んだ、幾多の手練手管にもかかわらず。

呪縛力も今はほどけ、脆くわびしい病葉となってしまった。

遊女が最後に長々と振り返ったのは誰が嘆いてくれるのかを見届けるため、

見返りじっと見つめた眼に迫る宵闇のことを。

その遊女が死んで、冬のか細く澄んだ雨が遊女の部屋を掃き出し、
男たちの歓びと苦悩を待ち受ける今、
新手の遊女がきつとまた羽振りをきかすことだろう、
古くて新しい花輪で男たちの欲望を満たし、その頭を飾ろうとて。

かくてまた、世界は寒さと死に向い、
つばめは青くまどろむ日々の中に姿を消し、
か細く澄んだ雨が「夏」の吐息の幻すらも追い払う。
遊女が死んでしまったのだ、幾多の手練手管にもかかわらず。

春はまた来る！ だから飲べ！ だが古い悲しみは、
依然としてつんと消え残る、空中に漂う燃え木の煙のごとく。

〔原詩〕

INDIAN SUMMER.

The courtesan is dead, for all her subtle ways,
Her bonds are loosed in brittle and bitter leaves,
Her last long backward look's to see who grieves
The imminent night toward her reverted gaze.

Another will reign supreme, now she is dead
And winter's lean clean rain sweeps out her room,
For man's delight and anguish: with old new bloom
Crowning his desire, garlanding his head.

So, too, the world, turning to cold and death
When swallows empty the blue and drowsy days
And clean rain scatters the ghost of Summer's breath —
The courtesan that's dead, for all her subtle ways —

Spring will come! Rejoice! But still is there
An old sorrow sharp as wood-smoke on the air.

〔平石訳〕（訳文は縦書き。）

小春日和

ひとり的高级娼婦が死んだ、美しく生きてきたのだから
 もろく悲しいページに記された契りは解かれ
 最後にじっと振り返ったのは眼差しに迫りくる夕暮を
 誰が悲しむかを見るためだ。

最上等の別の女がやがて羽振りを利かさざらう、

あの女が死に

冬の細くて清らかな雨が女の部屋を洗い流す今は
 男たちの喜びと苦しみのため、古くて新しい花をもち
 彼らの欲望を飾りたて、頭には花輪を戴かせるだろう。

世界もまさにそのように、冷えと死に向かう

燕が青いまどろみの日々を後にする時

清らかな雨が夏の息吹の名残を追い散らし――

美しく生きてきたのだから、死んでしまった高級娼婦――

春はまた来る！喜べ！だが今はまだ

漂う焚き火の煙のようにくっきりと昔の悲しみがある。

〔評釈〕 本詩の表題は“INDIAN SUMMER.”となっているが、“Indian Summer”の事は今ではわが国でもよく知られていて「小春日和」と訳す事になっているようである。しかし、これは気象学的には「秋ないし初冬に、晴天が続き、日中は高温、夜間は冷え込む特異な期間」⁶を言う様であり、また「小春日和」=「小春の頃の暖かいひより」、「小春の頃の穏やかな気候」、「陰暦十月のころの（ような）よく晴れた暖かいひより」⁷などに感じられる、穏やかで明るい感じは、この詩に表わされた憂鬱と悲哀の調子にそぐわないので、そのまま「インディアン・サマー」と訳しておいた。因みに現代ドイツ語でこうした気候の事を「老女の夏」（“Altweibersommer”）と呼ぶ場合、本詩の風情と相通ずるものがあり面白い。（但し、この語にまつわるドイツの古くか

らの民間信仰的解釈は複雑なので今は除く。)

本詩では、活気に溢れた季節の精の事を“courtesan”と呼んでいるが、“courtesan”とは、高級な娼婦、もしくは囲われ女みたいな女性を指すようである。訳語としては「女郎」、「上臈」、「遊女」などいろいろな考えられるが、いずれも時代がかったconnotationが付きまとう。さりとて、「高級コールガール」ならともかく、高級と娼婦とを単純に組み合わせるわけにもまいらず、ましてや「高級売春婦」ではぶち壊しになってしまうので、ここでは一応「遊女」と訳しておいた。

本詩で歌われている内容はさほどに複雑なものではない。それを今散文的に説明し直すと、次のようになろう。これまで様々な手練手管を使って男たちを誑かして来た遊女も、時や季節の変化には勝てず、今は冬の到来を前にまさに消えんとしている。彼女が夕暮時、後を振り返ってみても、自分の事に思いを懸けてくれる者として今はない。来年の春になれば、別の遊女(春・夏の精)がその座を奪い取り、権勢を揮いだし、相も変わらず彼女の周囲に群がる男たちを恋の喜びと苦悩で満たし悩ますのであろう。しかし、今は季節は冬へと(寒さと死の季節へと)向かう頃、燕たちもその姿を消し、冷たく細くしぐれる雨が、夏の吐息すら絶え絶えのものにしてしまう。かくて、遊女はついに死んでしまった。来年にはまた春が確実に訪れるのだから心配するには及ばない。だが、今は、冬枯れの季節を前にして、過去の精気、隆盛、栄光、絢爛と言ったものは死に絶え、ただその残り香の様な悲しみだけが、燃え木の煙のようにつんと鋭く空中に漂うばかり....と言った内容である。

本詩は、季節の変化、その隆盛と凋落の側面を擬人法で表わしているが、特に詩人自身のパーソナルな喪失感や、堪えられぬほどの悲しみといったものは感じられず、いわばコンヴェンションに乗っかりながら、時の移ろいへの感懐を一種Housman的な情調で歌ってみた詩と考えられる。

それでは翻訳の検討に移ろう。

平石訳では1.1の“for all her subtle ways”を「美しく生きてきた」と訳してあるが、“subtle ways”とは娼婦の色気の競い合い、生き残るための手練手管というほどの意味。⁸従って訳は「幾多の手練手管にもかかわらず」と

なる。「美しく生きてきた」ではそのように形容された高級娼婦の側から見ても、その誉め方はお門違いのように思われる。

1. 2 について、平石氏は“Her bonds are loosed in brittle and bitter leaves”を「もろく悲しいページに記された契りは解かれ」ともろく直訳しているが、まずこの“leaves”は、秋の色づき枯れかかった葉の事(それゆえ「脆く」「brittle」、「つらい」「bitter」)を指しているのであるから、「ページ (= 無論本の頁の事)」は誤訳。この場合、「ページ」と「葉」が掛詞という事もない。また「もろく悲しいページ」という訳語だが、「ページがもろい」とはどういう意味であろうか、紙の質でも脆いのであろうか。また“bitter”を「悲しい」と訳す事は無理。“Her bonds are loosed”の訳文の「彼女の契りは解かれ」も直訳であるが、平石訳は「彼女の(娼婦としての身分を拘束していた)契約から解放され」と言った意味のつもりであろうか。そうしてみると、契約書なら「ページ」が出てきてもおかしくないし、そうした(身分を拘束するような)契約なら「悲しい」と言うことも、敢えて言ってみるならば言えなくもない。しかし、それでは、別の次元の辻褄合わせとしては成り立っても、原文とは無関係の事になってしまうのである。

11. 3—4 であるが、氏は“Her last long backward look's to see who grieves / The imminent night toward her reverted gaze”を「最後にじっと振り返ったのは眼差しに迫りくる夕暮を / 誰が悲しむかをみるためだ。」と直訳している。これはどうやら直訳がたまたま当たったような例と考えられる。なぜなら、氏は“toward her reverted gaze”の“reverted”（「振り返った」）を省略して「眼差しに迫りくる」と訳しているのだが、英語の少しでもできる者なら、1. 3 の“backward look”（「振り返った眼」）と1. 4 の“reverted gaze”（「振り返った凝視」）の両方に「振り返った」が繰り返されるのはおかしいな、またこの「振り返った眼」と「振り返った凝視」および「迫りくる夕暮」と、空間的位置関係はどうなっているのだろうか、一応首を捻るからである。

そこで、今、森田訳を参考までに見てみると(後掲の森田訳参照)、氏は11. 3—4 を「彼女が最後に長く後ろを見たのは、誰が心痛してくれるか知るためだった / その差し迫った夜彼女の後方へ向けられた凝視に。」と訳し1.

3の最後の動詞の“grieves”を自動詞と取り、そこで文章を半終止の形にし、1.4の“The imminent night”を副詞に取っているようである。もし、本詩の第3連のように、1.3の後にダッシュでも付いていれば、1.3と1.4の間に間 (pause) を置いて、森田氏のように取る事も可能であろう。しかし、これは句読法上の問題としてダッシュがつけられていない以上、“grieves”を自動詞と取る事は難しい。こうした掴み難さは実は1.4の中ほどに見える“toward”の機能が曖昧な事から引き起こされているので、フォークナーが後年出版した『緑の大枝』の中ではこの“toward”は“of”になっている。そうなると、最終行の訳は、「遊女の振り返った眼差しの中に浮かぶまさに来たらんとする夜（つまり、眼の中に浮かぶ死の兆したるまさに来たらんとする夜＝無論、比喩）」となって、これは当時の一種のコンヴェンションに乗ったありふれた表現法だという事になる。

さて、平石氏の訳文に戻る。氏は原文の1.5の“Another will reign supreme”を「最上等の別の女がまた羽振りを利用することだろう」と訳しているが、“supreme”は“reign”に掛かる副詞であって“reign supreme”は英語としてはありふれた言い回し。⁹ 「最上等の別の女」(“Another supreme [woman]”) という風な形容詞ではない。

ここの第2連については、平石訳で一応意味としては通じているみたいだが、1.3のコロンの事に氏はどうやら気づいていないようであり、コンマとして訳している。本当の訳は、「雨が」「男たちの喜びと苦しみのために女の部屋を洗い流す(ただし平石訳)」のであり、「最上等の別の女が」「男たちの喜びと苦しみのために、古くて新しい花をもち、... 頭には花輪を戴かせるだろう。」というつながりになっているのではない。

原文の1.9の“So, too, the world, turning to cold and death”の“So, too, the world”の箇所を、氏は「世界もまさにそのように」とこれまた直訳しているが、氏の訳文の指している「まさにそのように」の「そのように」の指す内容は、論理的に言って第2連で歌われた事を指しているが、そこでは、来春になったら再びまた他の「春の精」が勢力を増し、わが世の春を謳歌するだろう、ということを書いていて、ここの「まさにそのように、冷えと死に向かう」とは内容的に全く相反するのであるが、氏はそうした自分の訳文

の流れにすら気づいていないようである。この“So, too, the world”における“too”は“again”の意味、そして“So”は「そういうわけで」という意味、即ち、“So, too”の訳は「そういうわけで、再び」となり、一語につづめれば「かくして」となるであろう。実際に、『緑の大枝』（1933年刊）では、この箇所は“Thus”と一語に書き替えられているのである。（“Thus, the world, turning to cold and death.”と。）¹⁰ このように、平石訳では、他の版を参照してみるという最少限の調査点検すら怠られている。

原文 1. 11の“clean rain scatters the ghost of Summer’s breath —”の訳文の「夏の息吹の名残を追い散らし—」という箇所であるが、「息吹の名残」という語句は日本語としてはまことに珍妙である。なぜなら「息吹」とは、「(活動を行う前の) 気配。生氣。きざし。」を意味し、「名残」とは「物事が過ぎ去ったあとになお残る、それを思い起こさせる気配やしるし。余韻や余情。」を意味するのであるから、¹¹ 物事の隆盛になる前のきざしたる「息吹」と物事の起こった後に残る情調である「名残」を直接繋げて、「息吹の名残」もしくは「きざしの名残」とするような事は、日本語としては不可能である。このような「息吹の名残」などという訳語は、氏の言語感覚が相当に乱雑なものである事の証拠となるであろう。

1. 11の“clean [rain]”も「清らかな」雨といったポジティブで主観的な意味合いでなく、単に「綺麗な」ぐらいの意味であろう。

1. 14. “sharp”は「くっきりと」といった視覚的な意味でなく、嗅覚的な感覚を表現した語である。漂う焚き火の煙なら、それは「くっきり」としてはいず、むしろ“blurred”しているであろう。

〔参考：森田訳〕

小 春 日 和

その高級娼婦は死んだ、巧妙な生き方をしたのに、
彼女の束縛は解かれて碎けやすい苦々しい葉となり、
彼女が最後に長く後ろを見たのは 誰が心痛してくれるか知るためだった
その差し迫った夜彼女の後方に向けられた凝視に。

別の一人がこの上なく勢いを振うことになろう、今や彼女が死んだのだから

そして冬の滋養の乏しい清らかな雨が 彼女の部屋を掃き清める、
男の歎喜と苦悶のために： 古く新しい花で [歎喜ハママ]
彼の欲望に王冠をかぶせ、彼の頭に花環をのせる。

それでまた、世界は、寒さと死へ向かい出す
ツバメが藍色のうとうとと眠い日々を空にし
清らかな雨が〈夏〉の呼吸の亡霊を追い散らす時――
その高級娼婦 あれは死んだ、巧妙な生き方をしたのに――

春が来ようとしている！ 喜べ！ だが それでもなくなりほしくないのだ
つんと鋭い古くからの悲しみは、空中に漂う森の煙のように。

〔森田訳への短評〕 1. 2の“brittle”が「砕けやすい」では、硬質のもの(石、ガラスの類)を連想させて「葉」の形容としては頂けない。

1. 4「その差し迫った夜」は、(彼女の側に)何か差し迫った用件か何かがあるように取られて変である。

1. 6の“lean”の訳を「滋養の乏しい」と訳す必要性が感じられない。

1. 14行(本詩の最終行)の“wood-smoke”(「薪の燃えるときの煙」の事)を「森の煙」と訳しているのは誤訳。『緑の大枝』のNo.35には“woodsmoke”とある。Cf.“woodsmoke: smoke produced by burning wood.”(Webster, 3rd.)

句読点についてだが、森田訳では英語式のものを用いている。邦訳上これも問題だが、直さずにそのままに残した。

〔No. 6の詩について〕 それではNos. 6, 7, 8, 10の詩について〔拙訳〕

〔原詩〕〔森田訳〕〔平石訳〕の順に掲げる。紙幅の制限により、各詩について“traitor”的な誤訳のみ、それぞれ数箇所ずつを指摘し、読者諸兄姉の眠気醒ましとしたい。行数の数え方は原文(英文)に則するものとする。

〔拙訳〕

詩人盲目になる

わが人生がその真昼にも達しない前、
そんなにもあっけなく闇夜によって切断してしまったお前よ。

これは何たる冗談なのか。寝ている者を起こし、
頼みもしないのに人生の日中に連れ出し、その上
折角目覚めた時間を今度は取り上げ、太陽も月も奪ってしまうとは。

暗闇が永遠に落ちる前の、
人生七十年だって山河のことを学ぶには短かすぎるというのに。
だからもはや見ることがかなわないのなら、
黄昏時や明け方に七変化する山河のことを
何一つ忘れないよう心に焼き付けるだけの時をくれ。

風は世界から吹き来たり、わが眼に見えぬ丘を隈取り、
私の頬に当たるので、私は絶望する。
お前は強い。だがお前の強^さ力^りを用うべき憎悪と恐怖とは他所にあるはず。
ああ、探し求めるために、両眼を残せ。
わが心を金色の部屋の空中ではばたかせよ。

お前よ、塵から、また紅蓮の苦痛の根から、
葉と蕾と成木にまで私を育ててくれた者よ。
私の両眼を奪わないでくれ！ たとえ私の手足は奪い、
舌をも奪い、聴力をも奪いたければそれもよし。命すら差し出そう。
だが、かの黄金色に輝く世界だけは返してくれ。

〔原詩〕

THE POET GOES BLIND.

You, who so soon with night would break
My day in half, before it reached its noon:
What sport is this — the sleeper to awake
Into a day he sought not, then to take
His waking span and rieve its sun and moon?

Three score and ten were short enough for learning —
Before the dark descends for aye on me —
These streams and hills, so give me time for burning

Upon my heart their eve- and dawnward-turning
Past all forgetting, if I must not see.

The wind blows from the world, upon my cheek,
Molding unseen hills, and I despair
You are strong: there's hate and fear to wreak
Your might upon ! O leave me eyes to seek,
To wing my heart through golden-chambered air.

You, who to leaf and bud and tree,
Raised me from dust and crimson roots of pain,
Take not mine eyes ! take limbs; let me be
Tongueless, dead to sound: take breath from me
Or give me back my golden world again.

〔森田訳〕

詩人 盲目となる

君、夜になるとすぐに私の一日を
正午にならないうちに分割してしまいそうな人よ：
これはなんの慰みなのか——眠れる者を目醒めさせて
求めてもいない一日へとつれ込み、それから彼の目醒めている
わずかの時間を取って太陽と月とを奪うとは？

二三が六十年と十年は学ぶには短かった——
闇が永遠に私を急襲しないうちには——
これらの流れや丘陵よ、だから私に時間を与えてくれたまえ
過去を全て忘れてその夕べや夜明けに向かう変転を
私の心に燃やしてくれるための時間を、もし私が見なくてもすむものなら。

風は世界から吹いてくる、私の頬に、
眼に見えない丘陵を型に入れて作りながら、だから私は絶望する。
君は強い： 君の力をयी費やさねばならない憎悪と
恐怖がある！ おお私に 捜し求める眼を残してくれたまえ
私の心を羽搏かせて黄金の部屋の空気の中を翔ぶために。

君、葉に芽に木に、
 私を塵と苦痛の紅いの根から育て上げた人よ、
 私の眼は取り上げないでくれ！ 取るなら手足にしてくれ；私を
 舌無しにし、音に耳聾いにしてくれ： 私から呼吸を奪ってくれ
 さもなくば私の黄金の世界を再び返してくれ。

〔森田訳への短評〕

(森田訳)11. 1—2 君、夜になるとすぐに私の一日を
 正午にならないうちに分割してしまいそうな人よ：
 これはなんの慰みなのか——…

(拙訳) わが人生がその真昼にも達しない前、
 そんなにもあっけなく闇夜によって切断してしまったお前
 よ。
 これは何たる冗談なのか。…

11.1—2の森田訳は何の事か分からないが、それは1.1の“with night”(「夜によって」の意)を「夜になると」と誤読しているからである。“so soon”は「そんなにもすぐに、そんなにもあっけなく」の意。

(森田訳)11. 8—10 これらの流れや丘陵よ、だから私に時間を与えてくれたま
 え
 過去を全て忘れてその夕べや夜明けに向かう変転を
 私の心に燃やしてくれるための時間を、もし私が見なくて
 もすむものなら。

(拙訳) だからもはや見ることがかなわないのなら、
 黄昏時や明け方に七変化する山河のことを
 何一つ忘れないよう心に焼き付けるだけの時をくれ。

1.10の“Past all forgetting”は「何ひとつ忘れないよう」の意で、「過去を忘れて」では誤訳。“If I must not see”は「見ることが禁じられる、見ることができないのなら」の意であるから、森田訳の「見なくてすむものなら」では意味はむしろ逆になる。

〔平石訳〕 盲いる詩人

おまえ、夜とともにもう間もなく

いまだ南中を知らぬ私の日を両断する者よ
どんな戯れなのだこれは一一眠っているのに
願いもしない日中に目覚めさせ、さらに
その目覚めの時を打ち切って太陽も月も奪うとは？

闇が永久に私に降りてくるまでの七十年は
これらの川や丘を知るには短すぎた
だからあらゆる忘却の彼方に
それらの黄昏へ下方へ向かう流れをこの胸に
焼きつけるまでの時を与えよ
私が見ることをもう許されないのなら。

風が世界のほうから私の頬へ吹き
見えぬ丘を形どるので、私は失意に暮れる。
強き者、おまえは恐れと憎しみを
力で押さえつけるのだ！ ああ、許してくれ
私の目が求め、空の黄金の部屋部屋に心を飛びたさせることを。

おまえ、塵と真紅の痛みの根から
葉と芽と木へと私を育てた者よ
私の目を奪わないでくれ！ 代わりに手足を奪え、
舌もなく、音も聞かなくていい、息を奪え、
さもなくば返してくれ、私のかつての黄金の世界を。

[平石訳への短評]

(平石訳) 11, 8-10, だからあらゆる忘却の彼方に
それらの黄昏へ下方へ向かう流れをこの胸に
焼きつけるまでの時を与えよ
私が見ることをもう許されないのなら。

平石訳 1. 9 の「下方へ向かう」は“downward-turning”を“downward-turning”と取り違えた誤訳。ここは“eve- and dawnward-turning”という具合に、“eve-”（「夕べ」）は次の“dawn...”（「明け方」）とともに“turning”へと繋がっているのだから、間違えようがないはずなのだが、どうした事だろうか。

(平石訳) 11. 13-14. 強き者、おまえは恐れと憎しみを
力で押えつけるのだ!

(拙訳) お前は強い。だがお前の強力を^{むづろき}用うべき
憎悪と恐怖とは他所にあるはず。

ここで平石訳は“wreak”を「押さえつけ」と訳し、“hate and fear”をその目的語とし、“Your might upon!”を“By your might!”ぐらいのつもりで訳しているので、これでは英文の意味も構文も全く把握していない事になる。

[No. 7 の詩について]

〔拙訳〕

わが墓碑銘——ミシシッピの丘

私が愉しく遊んだ遙かな青い丘では、
「恋人よ！」と鳴くツグミの声を追い掛けるかのように、
銀色の足した春がみずきの花蔭を歌を歌いつつ訪れる。
私が辿り来たった道程^{みちのり}の終わりが見えて来るときに。

天からの貰い水を受けるに相応しい形をしたこの私の柔らかい口を、
悲しみゆえにまさしく黄金の悲しみとせよ。
緑なす森にはここで夢みさせておけ、
そして私が再び故郷に帰るとき、私の胸の中に目覚めさせるのだ。

きっと故郷に帰るとも！ わが頭上にまどろむこの青い丘の土の中に、
私がしっかりと根づく以上、どこに死などがあるだろう。
たとえ私が死んだとて、私をしかと抱き締める大地には
きっと私が息づいていることが分かるはず。

老いた樹は黄金の過ぎた年月^{としづき}を嘆こうにも緑の若葉を持っていない。
私たちは輝く年月を使いながらついには後悔を買ってしまう。
ならば、私にしてみしわが眠りを揺すぶり破ってくれる
春の再訪のことを忘れたならば、私はまさしく呪われよ。

〔原詩〕

MISSISSIPPI HILLS: MY EPITAPH.

Far blue hills, where I have pleased me,
Where on silver feet in dogwood cover

Spring follows, singing close the bluebird's "Lover !"
When to the road I trod an end I see.

Let this soft mouth, shapèd to the rain,
Be but golden grief for grieving's sake,
And these green woods be dreaming here to wake
Within my heart when I return again.

Return I will ! Where is there the death
While in these blue hills slumbrous overhead
I'm rooted like a tree? Though I be dead
This soil that holds me fast will find me breath.

The stricken tree has no young green to weep
The golden years we spend to buy regret.
So let this be my doom, if I forget
That there's still spring to shake and break my sleep.

[森田訳]

ミシシッピー丘陵：吾が墓碑銘

私がこれまで楽しんできた遙かな青い丘陵、
花みずきに覆われて銀の徒歩で
ブルーバードの「恋人よ！」そっくりを歌いながら 春があとから蹠いてくる
ころだった。

私が道路まで 眼に見える端を踏んで行った時に。

雨に相応しいようにされたこの柔らかい口を
悲嘆に免じて黄金の悲しみだけにしてくれ、
そしてこれらの緑の森を ここで夢みさせ続けてくれ
私がまた帰ってくる時 私の心の中で目醒めているために。

私は戻ることにしよう！ 死者はどこにいるのだろう
頭上高く如何にも眠そうなこれら青い丘陵に
私が一本の樹木のように根づいている時に。私は死んでいる筈なのだが

私をしっかり抱き締めるこの土は 私に呼吸を見つけ出ししてくれるだろう。

その傷ついた木は 若い緑が全くなくて泣くに泣けない
 黄金の年月を過ごしては我々は後悔を買うのだが。
 だからこれを私の宿命にさせよう、もし私が 私の眠りを
 揺すって中断させる春がまだ存在することを忘れるなら。

〔森田訳への短評〕

(森田訳)1. 4 私が道路まで 眼に見える端を踏んで行った時に。

タイトルに「わが墓碑銘」とあるように、1.4は、恐らく自分の死んだ時を仮想してこのような言い方をしているのであろう。「眼に見える端を踏んで行く」とはさっぱり分からないが、これで森田氏は一体どのような歩き方を意味させようとしているのであろうか。

(森田訳)11. 11-12死んでいる筈なのだが
私に呼吸を見つけ出ししてくれるだろう。

1.11の「死んでいる筈なのだが」は“Though I be dead”の訳で、これは単純に“If I am dead”あるいは“Though I die”の意だから「私が死んでも」と訳せばよい。1.12の「私に呼吸を見つけ出す」は、直訳すぎて日本語としては受け入れられない。

〔平石訳〕 ミシシッピの丘——我が墓碑銘

遥かな青い丘、そこで僕は楽しく過ごしたが
 ミズキに隠れた銀の足どりで
 春がツグミの恋歌を懸命に追いかけながら歌う時
 僕には踏みしめる道の終わりが見える。

雨を受けるかたちにこの柔らかな唇を開いて
 ただ悲しみのための黄金の悲しみとしよう
 そしてこの緑の森はここに眠らせ
 僕がまた帰ってきた時に心の中で目覚めさせよう。

帰ってくるとも！ 死などどこにあらう
頭上にまどろむこの青い丘に包まれ
僕が木のように根づいている以上は？ 僕が死んでも
僕を強く支える土がまた息を与えてくれる。

僕たちがただ悔いを買うために費やす黄金の年月を
嘆く若い緑など老いぼれた木にはもはやない。
だからもし僕が、眠りを揺さぶり破る春が
また来るのだということを忘れたら、それを僕の
定めとしよう。

〔平石訳への短評〕平石訳の1.12の「僕をつよく支える土がまた息を与えてくれる」であるが、“hold me fast”の“hold”には無論「支える」の意味もあるが、この場合は「しかと抱く」と訳すところ。また“find me breath”の訳「息を与えてくれる」は同じ直訳にしても、まだ森田訳の「呼吸を見つけてだしてくれる」の方が原文に近い。だがここは誤訳かどうかといったことよりも、訳文がはたして詩文の文章になっているのかどうか問われるところ。

11. 15-16の「だからもし僕が．．．．．それを僕の定めとしよう」の訳だが、1.15の“doom”が「定め」では是認もしくは諦めのように、いかにも弱い。“doom”とは、後年、フォークナー文学のキーワードの一つにもなるわけだが、これは極めて強い語感を持つ単語で「呪い」もしくは「呪われよ」と訳すべきところ。

〔No. 8 の詩について〕

〔拙訳〕

十二月——エリーズへ

ぼくたちがともに知っていた春は、どこへ飛んで行ったのだろうか。
去年の枝も枯れ果てた。
けれどぼくは君の手がいつか冬空を捉まえ、
雨を撫でつけ、空を晴れやかにしたのを見た。

春が往くとき「眠りの木」から、
 これらの褐色で哀れな葉がまた後悔が溺れて消えてしまうのなら、
 僕の胸中の滴り嘆くかのような毎日も
 もはやわびしくつらい年月となることもないだろう。

私の心の中の冬にあって、君は芽吹く樹だった。
 そして春は遅れてやって来ただけに一層甘美だった。
 君よ、荒れたわびしい庭に
 春を運んで来てくれた風なる君よ。

君はすべて春そのものだった。そして五月、六月は
 君がそこにいればこそさらに緑に輝いた。
 だが今はどんよりとして雨の季節で、太陽も月も死に果て、
 世界中が闇。ああ、美しかった君よ。

〔原文〕

DECEMBER:
 TO ELISE.

Where has flown the spring we knew together?
 Barren are the boughs of yesteryear;
 But I have seen your hands take wintry weather
 And smoothe the rain from it, and leave it fair.

If from sleep's tree these brown and sorry leaves,
 If but regret could drown when springs depart,
 No more would be each day that drips and grieves
 A bare and bitter year within my heart.

In my heart's winter you were budding tree,
 And spring seemed all the sweeter, being late;
 You the wind that brought the spring to be
 Within a garden that was desolate.

You were all the spring, and May and June
Greened brighter in your flesh, but now is dull
The year with rain, and dead the sun and moon,
And all the world is dark, O beautiful.

〔森田訳〕

十二月： エリーズへ

私たちが共に知っていた春は どこへ飛び去ったのだろうか。
不毛なのだ 昨年の大枝は；
でも私は見てきた 君の手が冬の天候を捉え
そこから雨を滑めらかに取り去って晴天にしてくれるのを。

もしこれらの褐色の悲し気な葉が 眠りの木からならば
もし春が去ってゆく時は 哀惜のみが沈むのだとするならば
もはやどの一日も裸の厳しい一年間を
私の心の中に滴らせて悲しませるようなことはなくなるだろう。

私の心の冬にあって 君は樹木を芽吹かせていた、
だから春はそれ故一段と甘美に思えたのだ、遅れてはいても；
君 荒廃した庭の中に
春をつれてきてくれる風 よ。〔一字分のスペースは元のまま〕

君はすっかり春だった、そして五月と六月は
君の身体の中で更に一層明るく緑色となったが、今は陰鬱で
雨の降る年だし 太陽と月とは姿を見せないし
世界はすっかり暗いままだ、 おお素晴らしい。

〔森田訳への短評〕

(森田訳) 11. 5-8 もしこれらの褐色の悲し気な葉が 眠りの木からならば
もし春が去ってゆく時は 哀惜のみが沈むのだとするならば
ば
もはやどの一日も裸の厳しい一年間を
私の心の中に滴らせて悲しませるようなことはなくなるだ
ろう。

この訳文は何の事かさっぱり分からない。森田訳の1.6の「哀惜のみが」は“but [=only] regret”の訳語のようだが、1.6冒頭の“If but”は“If only”と同じ事で仮定法の出だしである事は初等英語。そして、1.6の「沈む」(=“drown”)の主語は「愛惜のみ」どころか1.5の“these brown and sorry leaves”と1.6の“regret”の両方である。

また、11.7-8についても、森田訳の「厳しい裸の一年間を(私の心の中に)滴らせて悲しませる」の様に、1.8の“a bare and bitter year”が自動詞である“drips and grieves”の目的語となる事はできず、これは“each day”を主語とする補語である。意味は詩的でやや分かり難いが、文法的な繋がりには“Each day that drips and grieves would be no more a bare and bitter year within my heart”となっているのであるから。

森田訳11.9-10の「私の心の冬にあって 君は樹木を芽吹かせていた、／だから春はそれ故一段と甘美に思えたのだ、遅れてはいても；」は“all the sweeter”の掛かり方を誤読したための初学者的な誤訳で、正しくは「私の心の中の冬にあって、君は芽吹く樹だった。／そして春は遅れてやって来ただけに一層甘美だった(拙訳)」となる。

1.16の森田訳「世界はすっかり暗いままだ、おお素晴らしい。」の箇所だが、原詩の“O beautiful”は、今は去ってしまった恋人への嘆きの呼び掛けで、「世界中が闇。ああ、美しかった君よ」という意味。森田訳の「おお素晴らしい」というもろ直訳では、恋人が去ってしまって荒涼とした世界そのものが「素晴らしい」という事になってしまい、全然素晴らしくない訳になっている。

[平石訳]

翻訳文は省略。

[平石訳への短評] タイトルに「イリーズへ」とあるが、Eliseの発音は[elɪz] (Elizabethの短縮形)であるから、「エリーズへ」とすべき。翻訳文へのコメントは略。

〔第10の詩について〕

〔拙訳〕

十一月十一日

日は灰色で、あたかも年中寒かったかのよう。
虚ろな大地を横切っていくつばめの鳴き声は、
春が南方へ飛び去ってしまったことを印している。
空に転がっているのはただ冬景色のみ。

ああ哀れな大地よ！このわびしく^苦い眠りが、
身じろぎ寝返りを打つとき、時はまたもや緑の季節を迎え、
おちこちの虚ろな小径にも草々が這うことだろう。
それを踏みしだく者としてなけれど。

四月、五月、六月が来ても、情熱が枯れ果てたゆえ、
傷つこうにも目覚めようにも、緑で萌え立たせることができない。
暗い十一月の大地よ、芽吹いて何になるのだ。
緑の季節を迎えんとてお前の眠りを破る必要とてないだろう。

枯れ木の間に声を潜めた風の嘆きが
ここかしこの小径の草を震わせ、
かくて「悲嘆」と「光陰」とは変わらざる金色の海——
静まれ、静まれ！ 彼が故郷に帰りたいば。

〔原詩〕

NOVEMBER 11TH

Gray the day, and all the year is cold,
Across the empty land the swallows' cry
Marks the south-flown spring: naught is bowled
Save winter, in the sky.

O sorry earth, when this bleak bitter sleep
Stirs and turns, and time once more is green,
In empty path and lane grass will creep,

With none to tread it clean.

April and May and June, and all the dearth
Of heart to green it for, to hurt and wake;
What good is budding, gray November earth,
No need to break your sleep for greening's sake.

The hushed plaint of wind in stricken trees
Shivers the grass in path and lane
And Grief and Time are tideless golden seas ——
Hush, hush! he's home again.

〔森田訳〕

十一月十一日

灰色の一日であり、一年中寒く、
空っぽの土地を横切るツバメの叫びは
春が南へ飛び去った証拠だ： 何も転がされるものはない
冬以外は 空には。

おお 悲しい大地よ、この荒涼たる厳しい眠りが
動き出して向きを変え、時がもう一度緑となると、
空っぽの小径や小路には草が這うことだろう、
誰もすっかりそれを踏んだりする人はいないままに。

四月、五月、六月と進んで 心はすっかり
欠乏状態となり それを緑に染めたり傷つけて目醒めさせたりできず；
出芽もなんになる、灰色の十一月の大地よ、
緑化のために汝の眠りをさます必要はない。

傷ついた木々に当る風の 声をひそめた悲嘆は
小径小路の草を震わせ
〈悲嘆〉と〈時〉とは潮汐のない黄金の海であり——
しっ、しっ！ 彼は再び帰宅した。

〔森田訳への短評〕

(森田訳) 11. 9-12. 四月、五月、六月と進んで 心はすっかり

欠乏状態となり それを緑に染めたり傷つけて目醒めさせた
りできず；

出芽もなんになる、灰色の十一月の大地よ、
緑化のために汝の眠りをさます必要はない。

「出芽」とか「緑化」とか何たる訳語なのだろうか。生物の発芽の実験なのか、緑化運動なのか。11月11日が、第一次世界大戦の「終戦記念日」だという事、戦争が終わった日、あるいはその頃の季節の虚脱感を表わしているという事をまず押さえたい。因みに、本詩の第4連は、後になってフォークナーの処女小説 *Soldiers' Pay* (1926年刊) のタイトルページにエピグラフとして使用されている。

〔平石訳〕

十一月十一日

第1、2連は省略。

四月、五月、六月のあいだ中

緑を教え、傷つけ目覚めさすべき心がなかった。

芽吹いても意味がないのだ、淀む十一月の大地よ、

緑のためにきみの眠りを破るには及ばない。

老いぼれた木立の中の静かな風の嘆きは

道の草々を震わせ

「悲しみ」と「時」は満ち満ちた金色の海だ ——

静かに、静かに！ 彼が家へ帰ってくる。

〔平石訳への短評〕 1. 9 [第3連 第1行] の “April and May and June, and …” の訳は平石訳の様に「四月、五月、六月のあいだ中」ではなく、“and” の機能および第2連と関連からみて「四月、五月、六月が来ても」となる。1. 10の平石訳「緑を教え」の訳は “green it for” の訳のようだが、代名詞

の“it”を無視して、意味も不明である。“green it”とは「土地、もう少し具体的には再び春や初夏が廻って来た土地を緑にする事」であるので、拙訳のようになるのではないだろうか。

またこれは、語感の問題だが、1.11の「淀む大地よ」は“gray earth”の訳語であるが、「大地が淀む」という表現は誤解を生むであろう。「淀む空気、淀む流れ、淀む政治」ぐらいには使えるが、元々固体である大地が淀むというのは、フォークナーが特別な効果を狙ったのならともかくとして、実際はそうではないのだから無用のニュアンスを付加し誤解を生んでしまう。

また1.13の「老いぼれた木立」という訳語だが、「老いぼれた男、老いぼれた木」などはせいぜい言えても、「木立が老いぼれる」という言い方は不可能であって、従って「老いぼれた木立」は日本語として許容できない。

さらに、1.13の“The hushed plaint of wind”の訳語の「静かな風の嘆き」という表現であるが、「静かな」(風)と「嘆き」とは本来的に合わない。ここでは“hushed”は「声を潜めて」(泣く、忍び泣く、嘆く)の意であって、“quiet, calm, tranquil, gentle”の意味ではないのだから、「静かな風の嘆き」では、原文の意味も掬い取れていないが、日本語自体としてもおかしい。¹²

【まとめ】『ミシシッピ詩集』は、フォークナーが比較的若い頃に、個人的に親しい女友達にプレゼントした一種の私家版で、手製の装本、タイプ書きという事もあり、部数も数部と限定されたものであった。しかし、前述したように、その中の8編は後になって『緑の大枝』(1933年刊)に若干の修正を施されて収録されたし、“NOVEMBER 11TH”とタイトルのあるNo.10の詩は処女小説の『兵士の報酬』(1926年刊)の冒頭に、小説全体を暗示するエピグラフとして利用された。この様に考えると、フォークナーは発表したあらゆる詩文を、後になって再利用したり、他の作品の中に組み込んだりといった、後年の彼の小説作法に顕著な独特の習癖を、物書きとしての徒弟時代から持っていたと言えるであろう。その事は、フォークナーの詩文や芸術にかける真剣さを示すとともに、一種のがめつき、記憶力の良さ、そして仕事を重ねながら、次第次第に自らを成長発展させて行く希有なる才能を証明するものでもあるであろう。

ところで私は、当初、各詩の評釈とともに、その詩のフォークナーの文業

全体における位置付けなどを考察してみる目算を立てたのだが、それは、実のところフォークナーの初期詩集の原稿の類や、こうした私家版の発掘と公刊が、そしてまたそれらについての研究が現在進行形の形で急速に進捗している現状では、未だ資料不足といった情勢にある事が分かって来た。しかし、フォークナーの初期の詩群には、彼の文学的 sensibility や人生と世界への vision が様々に、しかも生き生きとした形で表わされており、今後のフォークナー研究の宝庫となるであろう事は疑えない。

一方、日本の第一線の研究家の翻訳ぶりは、点検の結果、未だ完全にはほど遠しの感がある事が分かった。これでは翻訳本を信頼してフォークナーに接近しようとする一般読者の熱意を裏切るばかりでなく、先達の翻訳に依存しながら(?) 研究論文を書く大方の半素人の研究者の理解にも資さないであろう。従ってこうした翻訳に携わる研究者達には、責任感を持って仕事に臨んでもらいたいものである。

しかし、今少し皮肉を言うならば、翻訳がこれほど「すごい」のなら、フォークナー研究の道程もまだまだ遠く、研究者達にとっても、さぞかしやりがいのある事でござんしょう。そしてもう少し不謹慎な言い方をすれば、フォークナー学者も暫くは飯の食い外しがなくて大いに結構ですね、と。

勿論、だからと言って、誤訳やだらしない翻訳で大いに結構と言っているわけではない。そうではなく、いつの日か、フォークナーの翻訳においても、チェホフの神西清訳のように、思わず溜息を洩らすような名訳の世に出る日の早かれかすと熱望しているのである。だがしかし、ただ今の溜息は、ここまでお付き合いして下さった忍耐強く、また律儀な読者諸兄姉のそれと同様、別種類のそれである。(Sep.5, 1991)

註

1. Joseph Blotner, "Introduction to *Mississippi Poems*" in Carvel Collins and Joseph Blotner(eds.), *Helen: A Courtship and Mississippi Poems* (Tulane U. Press and Yoknapatawpha Press), pp. 131-147.
2. 森田孟「William Faulknerの詩」『文芸言語研究：文芸編』No.13(筑波大学文芸言語系)、pp.57-69.

3. 平石貴樹「ミシシッピ詩集」『フォークナー全集』1 富山房 1990年12月 pp.165-179.
4. Keen Butterworth, "A Census of Manuscripts and Typescripts of William Faulkner's Poetry" in James Meriwether(ed.), *A Faulkner Miscellany* (U. Press of Mississippi, 1974), pp.70-97.
5. Collins and Blotner (eds.), *op. cit.*, pp.149-161.
6. 前島郁雄「インディアン・サマー」『世界大百科事典』Vol.3 平凡社 1988 p.53.
7. 順にそれぞれ『広辞苑』第3版、『大辞林』、『新明解国語辞典』第2版による。
8. "subtle" = 「ずるい、陰険な、油断のならない」 研究社『新英和中辞典』第4版。他の大辞典も同様。
9. "Baseball reigns supreme in the summer month." 「夏は野球が全盛をきわめる。」
"reign"の項 研究社『新英和活用辞典』初版。
10. William Faulkner, *A Green Bough* (New York: H. Smith & R. Haas, 1933), p.58.
11. 「なごり」「いぶき」 松村明編『大辞林』三省堂 1990。
12. Cf. 加島訳「悲しき秋風は打ち萎れたる梢を鳴らし」、原川訳「手負いの木々に風は忍び泣き」。『兵士の報酬』冒頭のエピグラフ。それぞれ『フォークナー』I (新潮世界文学) 1971; 『フォークナー全集』2 1978より。

【付記】 小論のグラの校正に入る前に、たまたま日本アメリカ文学会第30回全国大会が琉球大学で開催され(10月26、7日)、私はそこで平石貴樹氏の「*Soldiers' Pay*再考」と題する発表を聞く機会を得た。以下はその簡単な報告である。

発表の中で、氏は「これまで幾人かの批評家達がFaulknerの自己パロディであると取っている Januarius Jonesの役割をもう少し大きく見積もるべきだ」と主張した。「(従来の批評は)奇妙な脇役であり、Faulkner自身のパロディであるとも考えられる Januarius Jonesの役割を低く見つもってきた」(Cf. 『日本アメリカ文学会会報』第29号 p 32)

その際、私は質疑応答の時に挙手し、「ジャヌアリアス・ジョーンズがフォークナーのself-parodyだと云う言い方だが、まず“parody”とは本来、先行する詩文のスタイル等を真似て、それを誇張したり歪曲したりして面白さを出すものである以上、ある登場人物が作家の自己パロディ(self-parody)だ、と云う言い方はどうも和製英語のように感じられる。あなたは幾人かの批評家がそう言っていると言われたわけだが、どの欧米の批評家がそのような言い方をしているのですか」と尋ねた。それに対して、平石氏は「今急に思い出せないのですが、なんなら後で調べまして個人的にお知らせしてもよろしいですが」と答えた。しかし、私はそれでは学会での公開を旨とする質疑応答の精神に反すると考えたので、さらに続けて「英語としてなら、登場人物が作家の“self-caricature”というのならありうるが」と言うと、「いやself-caricatureじゃなく(この場合)self-parodyです」とその点ははっきりしてい

ような事を言うので、「では具体的にどの批評家ですか」と追求すると、「Brooksとか……」と言葉を濁した。その「Brooksとか……」の返事で、私は瞬時に、それは明らかに嘘であると判断したので、「それは調べてみれば分かる事ですから」とその質問を打ち切り、次なる質問に移った。

その時、私が思っていたのは、「登場人物が作家の自己パロディである」と言う言い方は「パロディ」をゆるやかに「茶化し、揶揄」ぐらいの意味で取れば、少し苦しいが日本語としては成立しない事もない。①しかし“parody”の本来の意味と用法からして知性あるnative speakerがその様な用法（例えば“A certain character is a self-parody of the author himself.”と云った用法）をする事はありえないと云う事。②ついで「太っちょで、義勇兵として戦争に参加する事もせず、故郷に居残って、尿のように生暖かくかつ山羊のように淫らな黄色い眼をして、女と見れば見境無くその尻を追いかけ回し、挙句のはては、傷病兵ドナルドの死去の報に接して茫然自失として心神耗弱の状態にあるEmmyをまんまと物にしてしまうジャヌアリアス」をしも、フォークナー自身の“self-caricature”ないしは“self-parody”とする様なだらしな批評感覚は（歪曲の文脈なら別として）考えられない、と云った事であった。あまつさえ、作家フォークナーに関しては、何事につけても尊敬措く能わざるの恭しい解釈をするのが常であるCleanth Brooksにおいてをや、と云う感じであった。ブルックスの論文は無論フォークナー学の必読文献であるが、そこでブルックスはジャヌアリアス・ジョーンズはフォークナーの完全に毛嫌いするところの人物として描き出されているとして次のように述べている。“Faulkner obviously means for his reader to regard Januarius Jones as a thoroughly unpleasant fellow.” (Cleanth Brooks, *Toward Yoknapatawapha*, 1978, P. 70.)

私の印象では、平石氏は、①ジャヌアリアスの様な作者と正反対の人物（ブルックスの言では「フォークナーが読者に対して完全に不快極まる奴として見做してくれるように造形しているジャヌアリアス」）をしも、フォークナー自身の茶化し（平石氏の言で「パロディ」）と見做してしまうような極めて大雑把な感覚を持っている事、②自説に都合がよいように、出典の曖昧な文章を、勝手に思い込むか造りなした上で、それを根拠にして、自分の話をどんどん進めて行っている事などから、真面目には相手にできない発表であった。批評家の言説をきちんと押さえる事をせず、従ってスタートとなる根拠があやふやで、そうした類の批評文をコンテキスト抜きに適当に引き合いに出して、従来はこのように考えられていたが、私はこのように考えるなどと言われても、確かめようがないうちに、話がどんどん進んで行くのである。そのような捉え方なら、如何様にも話は纏まってしまうのであるから苦勞はない。氏の論が、概して批評家の文章の誤読に基づきながら、調子だけは威勢のよいものである事はかつて指摘した事があるので、興味のある向きはそちらを参照されよ（「ディキンソンの『雷』（“Thunder”）の詩群について」『文学研究』第86輯 九州大学 1989年）。

また氏の発表の中で、「Soldiers' Payは、パノラマ的な手法で書かれている」と言う事がかなり強調されたのであるが、私はこれについても、フラッシュバックの手法もあり、屋内の描写もあり、パワーズ夫人の意識の流れ風の回想シーンもある作品を「パノラマ的」とも呼ばず（「パノラマ」と云っても、大体からして氏が何の事を言っているかもはっきりしないし、その言葉自体、意味の確定した批評用語でもないで）再び質問して、「あなたの言う『パノラマ的』とは“multiple point of view”の事なのか、はたまた“omniscient viewpoint”の事か」と聞いたが、もとより明確な答えが返って来るはずもなく、司会者も「その[平石氏の言う]パノラマ的な手法が単純にそのまま後の作品に継続されて行くものでもないでしょう」と中立的コメントをされていたが、私に言わせてもらおうと、SPの全般的な漠然とした掴み方としても「パノラマ」と言う言い方は当たるまいし（平石氏はパノラマの一例としてこの『ミシシッピ詩集』をも挙げたわけだが）、そもそもそんな言葉を持ち出して来て、それを強調してみても、作品の解釈上なんの足しにもなるまいと思われた。

また学会発表の場合、引用の出典を記したハンドアウトぐらいは配布するのが礼儀であろう。と云うのも、例えば、氏は「Mahonが時間の化身」であるとするのに、原書のp. 170 (Liveright, 1954年版)の“He sat... like Time.”を引用したので、私は「該当箇所その表現は、単に一般的比喩(similie)であって、それは論拠にならないのではないか」と質問したわけだが、一般の聴衆はその事を自分の眼で読み、確かめようにもハンドアウトが手元にないために、その議論には参加できなかったのである。それでは誰のための発表だったのかと云う事になってしまうのである。

ところで、こうした質疑応答も含めて、その発表を熱心に聞いておられた慧眼の出席者も勿論おられたのである。九州地区のある大学で教えておられるヴェテランのそのフォークナー研究家は、翌日の朝食の時には既にもうおさらいが済んでいたようで、「あの箇所を見つけ出して、昨晚読んでみました。それにしても、あの方は何を『再考』されようとしたのでしょうか」と可笑しそうであった。

まあ、文学の学会などと言うものは医学の学会などと違って患者の人命に関わるものでもなし、長閑なものである。これを怒ればいいのでしょうか、はたまた笑えばいいのでしょうか.....。